

7.5 青木稲荷さんと新九郎

「八幡の語り草」第3話(2頁)

八幡神社の南方 200 米位の所に 30 坪位の丘がある。明治の始め頃まで、そこに青木稲荷さんがまつられており、とても、沢山の方々がお参りに乗られたそうナ。

慶応四年(1868)、神仏分離の「お触れ」により、八幡神社は法海寺から独立したが、経済的に困り拝殿の再建もできず、稲荷さんの拝殿を拝借することになり、明治十二年頃、高横須賀の鳶職の伊藤新九郎の手により、青木稲荷さんの拝殿移転作業がすすめられた。拝殿を運ぶための「コロ」に使うため、当時の中島、堀之内の村々から餅つき用の「うす」が借り出されたそうダ。

さて、鳶職の頭の新九郎さんは、美男の上に、きわめて美声。鈴のような声をはりあげて、唄をうたい、音頭をとっていたそうナ。珍らしい移転作業の上に、この美声。毎日、多くの見物人でにぎわったそうダが、その中に、おこりそうなことダが、とうとう起きてしまった悲しい哀れな物語がある。

その物語のヒロインの「お綱さん」は、その付近に住んでいた陰陽師の若いお嫁さんであった。夫の陰陽師は、職業がら、加持祈祷のため、旅また旅という毎日。お綱さんは幼児の守りをしながら、稲荷さんの移転工事を見にきている中に、新九郎さんの美男ぶりとその美しくうまい歌声にその心をうばわれてしまった。夫が帰ってきた時は、もう、どうにもならない間がらとなり、夫は一言のもとに離縁を宣告。新九郎も妻があり、お綱さんは養父の在所に帰り、悲しみにひたりながらも、針仕事等で幼児を育てたという。その頃、この地方で、この悲恋をつぎのように歌ったという。

コロははずれる お綱は切れる

新九郎ひとりが 苦勞する。

新九郎の家のことを調べたがわからなかった。

荒古の加古文堆さんの奥さん、それから上平井の早川正治さんの奥さん、ご兩人とも養父の出身であるが、若い頃、このお綱さんから昔でいう針仕事を習ったそうダ。その折、二人はお綱さんから、この歌や、悲しい話も聞いたということダ。